

# 体験



みんなで力を合わせて砂集めに挑戦



塩づくりの歴史や作業手順を真剣に聞く児童

## ～海の恵みを知る～

梅雨の晴れ間に恵まれ、絶好の塩づくり日和となった6月3日、波津地先の海岸にある茶々塩屋敷で、相良小学校6年生の児童91人が、「揚浜式製塩法」による塩づくりを体験しました。

地元「スマイル」の教育ボランティア団から、塩づくりの歴史や作

業手順について学んだ後、砂浜に道具を運んで体験を開始。児童たちは、扱いづらい昔ながらの道具に苦労しつつも、「スマイル」の皆さんの指導の下、みんなで力を合わせて、たくさん塩を作ることができました。

私たちが住むこの地域は、昔からたくさん「海の恵み」を受けてきました。生きていくために欠かせない塩もその一つです。

体験を終えた児童たちは、身近な海から塩を作ることで、改めてその恵みを感じていました。

また、「簡単だと思っていたけど、すごく難しかった」「昔の人の苦労がよく分かった」と、体験を通じて、普段の生活で何気なく使っている塩のありがたさも学んでいました。



- ①大原常夜燈 ②小田宮神社の案内看板 ③園村常夜燈
- ④須々木原観音堂 ⑤京松原常夜燈

常夜燈・・・夜道の安全のため、街道沿いに設置されている明かり。街灯。

# 「海のまち」の「塩づくり」を学ぶ



相良小学校6年生 塩づくり体験

夏になると多くの海水浴客でにぎわう市内の海岸。かつてこの砂浜には、200区画もの塩田が広がり、塩づくりが行われていました。作られた塩は、遠く海のない信州地方まで運ばれ、人々が盛んに往来した道は「塩の道」と呼ばれました。

## ～塩と人と道のつながり～

江戸時代から戦後の一時期まで、市内の広がる遠浅な砂浜では、「揚浜式製塩法」によって塩づくりが行われていました。

当時、作られた塩は、相良地域を起点とする総延長200キロメートルに及ぶ「塩の道(信州街道)」を通り、信州地方(長野県塩尻市)まで運ばれていました。

現在でも市内には、「塩の道」の道標や常夜燈が残っており、ウォーキングやサイクリングのコースとして親しまれています。

## 「揚浜式塩づくり」



- ①塩田づくり 砂浜の石や木くずを取り除き、塩田となる場所をきれいにします。
- ②マンガ引き 海水の浸透と乾きを良くするため、マンガという道具を使って溝を作ります。
- ③海水くみ・海水まき 隅々まで均等になるように、塩田に海水をまきます。
- ④天日干し 2時間ほど天日干して、砂を乾かします。
- ⑤砂集め 砂が乾いてカリカリになったら、砂をかき集め、コシキという大きなおけに入れます。
- ⑥かんすい取り コシキに海水を流し込み、砂に付いた塩分を洗い落とすと、濃い塩水(かんすい)が取れます。
- ⑦釜で煮詰める かんすいを煮詰めて浮かび上がる塩の華(結晶)をすくい上げます。にがりを取り除いて仕上げます。



スマイル 塩づくり指導者 大石通之さん(白井)

「海のまち」の魅力 今日1日の体験で、昔の人々の苦労や大変さがよく分かったと思います。将来、それぞれの道に進んだとき、海岸で塩づくりをしたこと、そして、生まれ育った地域の良さを思い出してくれたらうれしいです。

